

大阪市立自然史博物館

著者	鉄川 精
雑誌名	阡陵：関西大学考古学等資料室彙報
巻	23
ページ	10-11
発行年	1991-05-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024246

大阪市立自然史博物館

鉄川 精

1. あゆみ

昭和25（1950）年11月に大阪市立自然科学博物館として市立美術館2階廊下にて展示開設。32年に朝公園に移転、44年から新館建設構想をねり始め5年間の準備期間を経て、49年4月に市立自然史博物館として長居公園に開館。59年に開館10周年を記念して常設展更新計画が策定され61年4月に展示室を一新し開館した。筆者は59年12月から61年3月末の常設展更新業務完成までの間、非常勤学芸員を委嘱され更新業務に参画した。

2. 自然史とは

自然史というのは、Natural history の直訳で明治時代には博物学と訳されていた。博物学は、自然界の諸現象・諸事物に関する広範囲な知識を集積する学問という意味である。

自然に関する知識を広く集め羅列的かつ枚挙的に理解しようとするのではなく、全体像を把握するために、自然界の法則性や自然と人間のかかわりを発達史的見地から理解するより他に方法がない。これこそ科学を市民のものとし人間の未来を保障する道なのである。そのような意志のもとに自然史と表現したのである。

市立自然史博物館は、以上のような目的でつくられ展示もこの線にそって展開されている。展示は、ひとつのストーリーによって組み立てられ、それは27のテーマから成る。テーマは幾つかの小テーマに分かれABCの記号が付けてある。第1展示室入口から1A→1B→1C→1D→1E→2Aの順に見ていくと、ストーリーがなめらかにわかる。

3. 事業内容

自然界の構造と機能に関する理解を深め、自然発達の頂点に位置する人と自然のかかわりを大阪という身近な自然をもとに追求するとともに、これらに基づく社会教育を行うことを目的として、具体的には次の4分野の活動を行っている。



写真1 大阪市立自然史博物館正面

(1) 調査研究活動

学芸系スタッフ全員は学芸課に所属し、地史・第4紀・動物・昆虫・植物の5部門の研究室で研究業務に携わっている。自然の生いたち、生物の分布と変遷、生物の系統分類、自然保護に関する基礎的な調査研究を行い、研究成果は、諸学会の学会誌や自然史博物館発行の刊行物などに発表している。

(2) 資料収集保管活動

自然界に存在する物質資料（一次資料）それに関連する二次資料を系統的に収集し整理し保管することは、自然史系博物館の基本的任務のひとつである。博物館資料は、研究・展示・教育などに利用するだけでなく、将来のために永久に保存すべき自然界の記録であるとともに、市民が多角的に利用できる貴重な財産でもある。

収集される資料は、大阪を中心にして近畿地方、日本全域、さらに全世界へと広範囲におよぶ。外国の資料については、自然史博物館の研究課題に基づきユーラシア大陸の東南部に主たる重点をおいて収集するようにしている。館員による収集や購入だけでなく、市民からの寄贈、国内・国外の博物館や大学との資料交換などによる資料総数は90万点を越えている。現在研究中や未整理のものを除くと、登録済標本数は収蔵標本数より少ない。5部門を通じて平成元年

度末における整理済標本は734、048点であり、未整理標本は180、434点である。

自然物を標本にした場合、その性質により①乾燥標本、②液漬標本、③封入標本に大別され、生物系・地学系ともそれぞれに適合した保存形態がとられている。

乾燥標本—生物系では、植物腊葉（おしば）、キノコ類、材など、昆虫、動物剥製、動物骨格、貝殻などである。植物腊葉は一定の大きさの台紙（大阪自然史博物館：440×310mm、110～135kgの上質紙）

に符箋とともに貼り付けて保存し、密閉できる戸棚に防虫剤（ナフタリン）をいれ保管する。昆虫は展翅などで形を整えて乾燥し必要に応じて防腐処理をし、昆虫針にラベルと一緒に刺し昆虫箱に立てて保存する。昆虫箱の左側の溝にあたためてとかしたナフタリンを流しこみ固める。昆虫箱は害虫の侵入を防ぐとともに防虫剤の消耗を防ぐため、気密性のよい構造になっており、密閉できる戸棚に保管する。これら生物系乾燥標本のすべては、年間を通して気温18°C、湿度60%に調整された第2収蔵庫（2階）に保管されている。地学系では、岩石、鉱物、化石、微化石などである。

液漬標本—主として魚類・両生類・ハ虫類・クモ類などが液漬標本として保存される。保存液は、60～80%アルコール液またはホルマリン10倍液である。容器には標本びん、広口びん、マヨネーズびんなどが用いられる。液漬標本を収納する棚には、地震によりすべり落ちないよ



写真2 昆虫の整理棚

うにストッパーがつけてある。

封入標本—生物系では、動植物の組織や花粉をパラフィンまたはグリセリンゼリーで封入したスライドガラス、透明樹脂に包埋した魚類の標本などである。地学系では、岩石、鉱物、化石、植物遺体をバルサムまたはレークサイトセメントなどで封入したスライドガラスである。

一方、資料収集活動の一環として自然史関係の文献収集を行っている。蔵書の大部分は館発行物との交換によるが、購入以外に個人・団体・自治体などからの寄贈によるものもある。普及図書は普及センターにおき入館者の閲覧、市民からの相談や質問に利用されている。専門図書は各研究室に、逐次刊行物・調査報告書は書庫に配置されている。平成元年度末で図書が6,982冊、逐次刊行物・調査報告書が81,951冊、館の蔵書数はあわせて88,933冊である。

(3) 展示活動

常設展では一貫したストーリーのもとに、標本や模型その他の資料をテーマ展示しており、展示資料数は約8,400点である。展示では実物標本にさわれる触察展示のコーナーを設け、視覚障害の方々にも理解できるよう努力している。

〔以下16ページへ続く〕

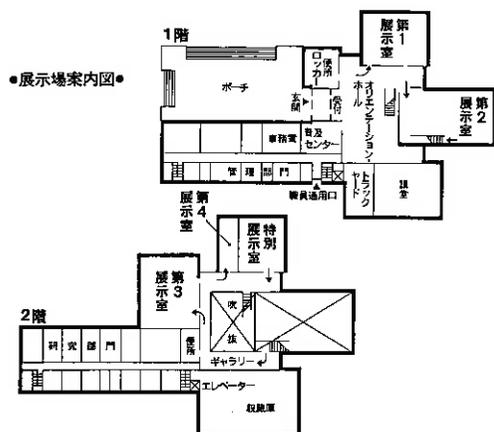


図1 展示場案内

このコーナーには点字解説板をつけてあるほか、展示の概要を紹介した点字によるパンフレットも用意してある。

このほか年1回の特別展と年数回の特別陳列を企画し、調査研究の成果や館蔵品の紹介を行っている。

(4) 普及教育活動

自然に親しみ理解を深めるための社会教育活動として、年数回の野外観察会や室内実習、毎月の自然史講座と科学映画会など各種の普及行事を開催している。

4. おわりに

これらの事業を相互に関連させることにより、質の高い博物館活動が可能になる。

編集後記

『阡陵』23号をお届けいたします。原稿をいただいた最初は2月下旬で雪の降り積った日でありましたが、今は新緑に陽光が映え、その下を学生達が楽しく語らいながら通り過ぎていきます。季節の移りには驚かされます。原稿をいただいた諸先生方に改めてお礼申し上げます。

平成3年度・4年度にわたる資料室運営委員が決定し、委員長には網干善教文学部教授、副委員長には上井久義文学部教授が選出され、前年同様の執行部となりました。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

本資料室を今日の充実発展にお導びき下さいました末永雅雄先生が去る平成3年5月7日午後2時30分ご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。所蔵資料の大部分(約10,000点)は元毎日新聞社長本山彦一氏蒐集品で、その膨大な全資料を関西大学へ移管されるのにご尽力下され、その資料を活用し多数の考古学徒が育ち、社会で活躍しています。先生は日頃より博物館設立につき熱っぽく語られていました。学芸員養成の

博物館学課程も先生のご尽力で昭和36年開講され、本年でちょうど30周年になります。その間多数の学芸員資格取得者が博物館、美術館あるいは都道府県及び市町村の文化財担当者としても従事し、業績をあげています。またこの人々の執筆により、記念論文集の発行も計画されております。資料室は2,000㎡の床面積があり、博物館担当施設として申請するに基礎的条件はそろいました。この30周年を記念に設立要望書が提出され末永雅雄先生の学恩に報いることができれば望外の喜びです。管理運営委員の諸先生及び教学、法人のご指導ご支援をお願い申し上げます。

表紙の写真は「須恵器」台付碗で高さ12.8cm、口径10.4cm、台部底径9.8cmの整形の美しい灰白色の土器でロクロは右まわりである。深い碗にふんばった脚がつき、口縁はやや内彎し、中央には沈線1条が入り、底部近くで幅広い沈線1条が走っている。愛媛県温泉郡出土と朱書されている。出土例として奈良市富雄丸山2号墳、徳島県恵解山5号墳などがある。 [角田芳昭]